

からから 便り

もくじ

- イベントのご報告
- 岩手・宮城・福島をたずねて 祈りと伝承とアーカイブ
- それぞれの「ここから」物語
- 寄稿「1 ページのたより」

- 各相談窓口
- 北海道における被災避難者の受入状況
- 編集後記



の写真を見せながら、谷口さんは語ります。「この写真は昭和64年1月7日、昭和が終わった日の旭川の太陽です。僕は太陽を

撮ろうと思って撮ったのではなく、天皇崩御の知らせの後、街に出たら号外が配られはじめたり、半旗が掲げられたりするのを見ながら、空を見上げて「どうしてこの日にオレは東京にいないんだろう...」と、残念に思いながらシャッターを押した写真なんです」谷口さんの物語を知った後に見ると、同じ写真でも表情が違って見えます。まるで、感情や時間や背景まで記録しているかのようです。

11月10日、今年は札幌にて芋煮会を開催しました。芋煮は今年も穴戸隆子さん(福島県伊達市)が中心となり、お手伝い参加の方々と大鍋で調理。美味しい香りが建物内に広がりました。

東日本大震災と前後してスマホが普及し、手軽に写真が撮れる反面、撮った写真を整理できないままの方も多いと思います。谷口さんは、こうした一人ひとりが何気なく撮った写真が持つ価値や大切さを教えてくれました。

「アーカイブとはなにか? 記録の保存だけではなく、活用すること、活用すること、活用すること。極端に言えば、『アーカイブってなんですか?』と言ったら、それは『愛』です。私自身を認めていく、という作業なんです。自分を愛すること。そしてこれからの未来を生きたる人に渡すバトンなんです。あなたは歴史の証言者になります」

会場に集まったのは岩手、宮城、福島、関東から北海道に避難されたみなさんと、ゲストでお呼びした、不登校を語る親力フェ ポレさん、葬送を考える市民の会さん、弁護士さんやボランティアさんスタッフも合わせて、総勢25名。おしゃべりしたり相談したり、久しぶりの再会に話を花を咲かせたり、そして、ギターを持って参加してくれたご夫婦による、サブライズライブもありました。

同窓会のような懐かしさや知り合えた嬉しさ、いろんな思いがひとつになった芋煮のような美味しい時間でした。

—— イベントのご報告 ——



自分アーカイブのススメ
記録と記憶のシンケイスイジヤク
会場 旭川市市民活動交流センター
CoCode

2022年から旭川市の貴重な写真を永久保存する活動を行って、いる谷口さん。しめくりに、こんな言葉を伝えてくれました。
「なぜ、アーカイブするのか。それは、未来を信じている、ということです。これから十年、二十年、五十年、百年後を生かされていると望んでいるから。
過去のことを知らずして新しいとは言えない」



やっぱりは芋煮会
会場 市民活動プラザ星園(札幌市)

岩手・宮城・福島をたずねて 祈りと伝承とアーカイブ

発災からもうすぐ14年。地震、津波、原発事故という多重災害により、広範囲に影響をもたらした東日本大震災では、受けた被害も、そこから回復に向かう過程もさまざまです。しかし、犠牲になられた方々への追悼と鎮魂、「忘れないでほしい」という願い、悲しみを繰り返さないために伝え残したいという思いは、今、どこに暮らしていても、震災を経験した人であればみな同じではないでしょうか。

追悼施設と伝承するための場

発災から10年となった2021年を前後して、岩手・宮城・福島の各地に追悼施設や伝承施設が整備されてきました。

国営では、高田松原津波復興祈念公園（岩手県）と石巻南浜津波復興祈念公園（宮城県）が開園し、公園内には県営の津波伝承館があります。福島県では県営の東日本大震災・原子力災害伝承館が先に開館し、国営祈念公園は現在双葉町と浪江町の境界に整備中です。

さらに、市町村が管理・運営する慰霊・追悼施設や伝承施設、震災遺構も

整備され、民間企業や市民有志が運営する遺構や資料館、ミュージアムなどもあります。

「こうした施設では、忘れないため、風化させないためにどんな工夫をし、どんな形でアーカイブ（記録保管と活用）しているのだろう」

私たちは昨年の夏、数ある中から運営主体が異なる3つの施設を選び、訪れました。

■岩手県

東日本大震災津波伝承館

いわてTSUNAMIメモリアル

2019年9月22日、陸前高田市の高田松原津波復興祈念公園内に開館した、県立の伝承館です。



ここは、国内外の旅行客が多く立ち寄っている印象でした。〈歴史、事実、教訓、復興〉という4つのゾーンで構成され、時代を遡りこれまでの津波の歴史や被害を伝えるデータ（数字）、復興へのプロセスなどが掲示されています。津波を経験したことがない人々にも威力や破壊力が伝わるように考えられた展示は、見る人に「津波から命

を守るためにはどうしたらよいか」を考えさせます。

展示の中に、被災した市町村の記録誌や支援の記録、写真集など岩手県に關係する書籍を集めたコーナーがあります。このコーナーの中に『生きた証』という本がありました（写真左から3冊目）。津波により1286名（人口の約1割）が犠牲となった、大槌町が発行する本です。

「亡くなられた全住民の人生を記録し伝えることが、犠牲者を弔い、将来の命を守ることにつながる」

前町長碓川氏が陣頭指揮をとり、平成26年に町民有志による実行委員会がたちあがり、官民一体となったプロ



書籍コーナーの写真。左から3冊目の青い背表紙が平成29年3月に発行された「平成28年度 生きた証」。545名の歩みが記録されている。

ジェクトが始動。ご遺族を探し、聞き取りを行い、平成28年度版では545名、平成29年度版では76名の生前の歩みやご遺族の思いを綴る回顧録が発行されています。

こうした「記録の残し方」を伝えることも、伝承館の役割の一つだと感じます。

■仙台市 せんだいメディアテーク

3がつ11にちをわすれないためにゼンター「わすれん！資料室」

2001年に開館した

せんだいメディアテークは、市民図書館やイベントスペース、ギャラリー

などからなる仙台市の公共施設です。

発災から約2ヶ月後の5月3日、市民や専門家、アーティスト、スタッフが協働し、東日本大震災という大きな出来事に向き合い、考え、記録し発信していくためのプラットフォームとして「3がつ11にちをわすれないためにゼ



ンター（以下、わすれん！）が開設されました。ここでは、誰もが記録の一端を担えます。

「わすれん！」では、「震災の記録・市民協働アーカイブ」としてさまざまなメディアを活用して記録を保存し、ウェブサイトで公開しています。そして2022年11月には、せんだいメディアテーク2階に常設展示「わすれん！資料室」をオープンしました。

「わすれん！資料室」では、DVDや写真などさまざまな記録資料の一部を手にとってみることができ、震災にまつわる話を録音保存するための「わすれん！録音小屋」で音声記録を残すこともできます。

資料室を訪れて、心を動かされたのは「インタビューシート」東日本大震災での体験や考えについて、あなた個



「わすれん！録音小屋」録音はふたりひと組で行う。開館時間中は随時利用できる。

人のことを教えてください」でした。2023年3月から設置され、来場者が一人一人の体験を綴っていく、というものです。書かれたシートを閲覧すると、全国各地からここを訪れた方々の記録がありました。あの日に起きたこと、いま思うこと…そこに記されていたのは、市井のひとが生きる「時代の記録」のように感じました。

東日本大震災での体験や考えについて、あなた個人のことを教えてください。
[書くことも、聞いてみることもぜひおすすめです。]

| | | |
|--------------------|--------------------|--------------------|
| 震災当日の出来事 [書くこと] | 震災当日の出来事 [書くこと] | 震災当日の出来事 [書くこと] |
| 震災当日の出来事 [書くこと] | 震災当日の出来事 [書くこと] | 震災当日の出来事 [書くこと] |
| 震災当日の出来事 [書くこと] | 震災当日の出来事 [書くこと] | 震災当日の出来事 [書くこと] |

震災当日の出来事
[書くこと]

ウェブサイトでは、これまで綴られたシートを閲覧できる。行けなければ書いて記録を残したい場合は、シートをダウンロードして送ることもできる。

■福島県いわき市

原子力災害考証館 furusato

「今起きていることに目を背けず、きちんと考証し、未来へつないでいくことが願い」



いわき湯本温泉にある旅館「古滝屋」

の16代目当主 里見喜生さんが発起人となり、2021年3月12日、旅館の9階に開館した資料館が「原子力災害考証館 furusato」です。水俣病センター・相思社に併設する「水俣病歴史館」「空と大地の歴史館」（運営：成田国際空港株式会社）が構想のヒントとなり、原子力災害に向きあい、考証するための場が必要と考えつくられました。

全国 の原発事故訴訟に関する資料、さまざまな団体が発行する冊子や情報紙や講演会・イベントのチラシ、写真や書籍など、ここに集まる資料ひとつひとつが、里見さんの言葉を借りていうならば「草の根の活動の軌跡」。県内はもとより、県外の活動にも目を向けていることがわかります。



「古滝屋」当主であり、原子力災害考証館 furusato 館長の里見喜生さん。

昨年3月、「子どもと原子力災害保養資料室《ほよよん》」が同じ階の別室にオープンしていました。関西の保養主催者を中心に結成された「子どもと原子力災害 保養資料室《ほよよん》を育てる会」によって運営されています。発災当時幼かった子どもたちの成長などにより活動が見えにくくなる中、原発事故特有の支援活動である「保養」を次世代に伝えていくための資料を収集保存し、活用していくための資料室です。



アルバムと同じように、昔のイベントのチラシや情報紙も、見ていると忘れかけていたその頃の記憶もよみがえってきます。こうした資料室に集められたものは、記憶の引き出しを開ける鍵のようだと思います。

それぞれのここから物語

《議会編》



今回は、東日本大震災発災直後の北海道議会と札幌市議会の動きに注目し、会議録に残る避難者受け入れ支援の記録を追いました。

(参照…『わたしたちの道議会』、北海道議会時報、道議会会議録データベース、札幌市議会会議録検索システム)

私たちの生活に関わるさまざまな施策は、議会が決定しています。議会というと、議場に全議員が出席して議論するイメージだと思いますが、それは知事や市町村長が招集する「本会議」。規模の大きな議会では、通常、本会議で議決する前に、それぞれの議案を審議するための「委員会」が開かれ、委員会で討論・採決されたことが最終的に本会議で議決されます。例年3月上旬から中旬は、多くの自治体で定例議会が開催される時期なのですが、2011年は4月10日に統一地方選挙を控えていたため、道議会、札幌市議会ともに例年より早い3月9日に閉会していました。そこで、臨時会の招集とそれに伴う委員会が開かれ、東日本大震災に関わるさまざまな報告、支援施策の審議が行われました。

道議会編

発災から6日後の3月17日、総務、経済、水産林務委員会が開かれ、道内被害状況の調査報告や被災地への支援状況報告への質疑が行われました。そして3月30日、道政史上初めて選挙期間中に第一回臨時会が招集され、震災対応のための様々な補正予算が議決されました。

この予算の中には、避難者受け入れ先として公営住宅や雇用促進住宅、ホテルや旅館等の確保や、公営住宅に入居するまでの間の宿泊施設無料提供制度も含まれます。すでにこの時、北海道庁内に総合相談窓口を設置し、被災者への住宅のあっせんや生活情報の提供を行っており、400名以上の被災者が北海道へ避難。被災3県には、集落や学区、避難所単位での避難受け入れについて具体的に話をしている、との記録もあります。

札幌市議会編

札幌市議会では、3月23日に臨時会と総務委員会が開かれ、震災支援のための補正予算や被災地および市内避難者への支援状況に関する質疑・答弁が行われました。札幌市は、義援金3億円を補正予算として計上し、約半分以上を仙台市、半分を赤十字に寄付することを決めています。

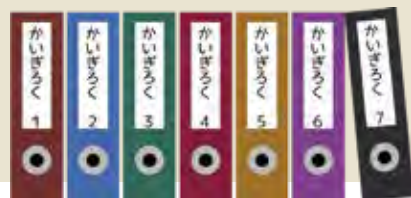
委員会では、被災地への応援体制、透析患者や医療機関からの患者の受け入れ体制、市内避難者への支援体制などへの意見や質疑がありました。住宅に関しては、6月に一般募集予定だった市営住宅250戸を被災者用に確保し、3月17日に募集開始、22日時点で35世帯117名が入居しており、その多くが福島県の避難指示区域の方、と記録があります。

5月17日から開かれた第二回臨時会では、市内避難者への具体的な支援体制が審議され、市内に避難した小・中・高校生への修学支援一時金(2万円)や、生活支援一時金(10万円)の支給、避難者への情報提供も含めたNPOによる被災者生活支援事業など、具体的な施策が決められていきました。

会議録を読んで思うこと

今回、会議録を読んで知ったことがたくさんありました。たとえば、北海道が単年度更新だった住宅支援を2年更新にできないか考えていたこと、札幌市の生活支援一時金は、富士メガネさんからの寄付金を原資にしていたこと。被災地支援では、派遣された札幌市消防局の捜索担当範囲に、多くの子どもたちが犠牲となった石巻市立大川小学校も含まれており、同年代の子供を持つ隊員も多く、精神的に厳しい状況にあったこと。そして、メンタルサポートチームが立ち上げられ、隊員の心のケアにあたった、ということ…。

私たちに知らされることの前後には、そこに行き着く過程やその後の出来事があり、多くの人が携わりさまざまな意見や議論もある。そして、残念ながら実現できず終わったことがあっても、こうしてどこかに記録されていることで、知る機会が残されていくのだと、改めて思いました。





寄稿

1ページのたより

後に東日本大震災と呼ばれた出来事

話はいくらでもできる。聴いてくれる人がいるなら話したいし、伝えていかなければとも思っている。ただ、当時の話はすらすらと出てくるのに、あまりにも衝撃的なこの現実には私の心がついていけないのか、しっくりと自分の腑に落ちていないという感覚がある。

2011年3月11日金曜日、発災。当時私は医療職に就いており、本来の技術職と兼務で病院の安全管理を担当。

発災後の最初の行動は、患者と職員に落ち着くよう言葉かけ。次は被害の状況把握、避難すべきかどうかの判断、停電と断水の場合の対応（当時電気と水は使えた）、104名の入院患者と外来患者の薬の在庫は？ 食料の在庫は何日分？ などすべきことは山ほどあった。安全管理の知識を総動員してアドレナリン出まくりの状態。院長、事務長と相談しつつ、各職員に協力を求めて患者を守り抜く決意。我々は地震だけなら院内で耐えると決めていた。

しかし、絶え間なく襲ってくる地震に引き続く原発事故の報道、遂に避難指示の発令。病院は果たして避難指示区域の20キロ圏内か、地図を広げて確認。104名の入院患者さ

んを他の病院や施設に受け入れてもらうまで、避難所数か所を経て1週間かけ東京まで移動。全員の転院を終え、ここで医療職としての使命は終わり、この時から各職員はそれぞれ自分自身の避難を開始。私の家族や家は？

夫はすでに他界、長男は車で5分程度の場所に妻と3歳と6歳の娘と生活、次男は同居で家の近くで自営業。家は一部損壊。通信が極めて困難な中、一度だけ次男と電話で通話可能。「兄家族と家を出る」と連絡があり、無事は確認。家は30キロ圏内で屋内退避指示区域（後の緊急時避難準備区域）。居ても良いが外に出る時は防護服着用とされた。出るか残るか判断は住民に委ねられ、その後この時の判断が地域の分

断を生むきっかけともなった。多くの人にとってこの震災は地震に続く大津波のあの映像のイメージ。しかし私にとっては地震、津波に続く広大な地域を核汚染した原子力発電所の事故なのだ。

想定しえない事故？

20年位前、当時いた病院の安全会議で検討した事例がある。未知の感染症、SARSが騒がれ対応を検討した。田舎の小さな精神科の病院に来るはずもない感染者。万が一を考え、事が起これば想定外では済まないとして防護服の購入、役所への連絡、患者移送方法等を検討。当然そんな事態にはならないまま、その防護服は核汚染事故での使用となった。この事故は、あまりにも事が大きすぎて謝る相手も謝られる相手も

見えにくい。この事故の当事者は想定しえなかったのか？ 想定しようとしなかったのか疑問が残る。

当時、「今すぐに影響はありません」と政府による繰り返し呼びかけに背筋の凍る思いをした。

時々「福島に帰りたいくないか？」

と聞かれる。核汚染という目に見えないものへの恐怖、国の技術と知識をフル活用しても今だに数ミリの燃料デブリ取り出しに手こずっているあの場所に、帰るべきではないと思っている。しかし、童謡の故郷（兎追いかの山、小鮒つりしかの川）を聞く度に涙が溢れてくる。

自分の本音はここにあるのかとも思う。複雑な気持ちを抱えながらもこの地で前進して行く決意です。

（ペンネーム N）



ただ、ふるさとに帰りたいだけ

ああ、また3月が来るなあ
毎年思うけど……
あんなことが起こったなんて、
本当だったのかしら。
大変な事だったな……

あの時、私は病院に勤務
していて、大勢の患者さん
の命を守るため
職員みんなが
ギリギリの状態
で必死に動いた。

地震で大パニックの中
追い打ちをかけるように
原発の事故……
今すぐ影響は
ありません！
幸い家族は無事だった
が、目に見えぬ恐怖が私
たちを襲った……

誰が悪いの？ どうして
解決できないの？
故郷に帰りたい！
……でも帰るべき時がこない。
もどかしい気持ちをかかえな
がら日々を送っています。

悲しくても、前に進むしかないのですね……。



東日本大震災の影響により
道内に暮らしている方の

相談窓口

TEL 011・200・0973

NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター

平日 10:00~17:00

FAX 011・200・0974

✉ info@hnposc.net

〒064-0808

札幌市中央区南 8 条西 2 丁目 5-74

市民活動プラザ星園 201



地下鉄東豊線「豊水すすきの駅」
6 番出口から徒歩約 7 分
地下鉄南北線「中島公園駅」
1 番出口から徒歩約 5 分

メールや FAX、
お手紙でも
ご相談ください

岩手県、宮城県、福島県が設置する
相談窓口はこちら。



岩手県

いわて被災者支援センター

電話 019-601-7640 (平日 9:00~17:00)

メール info@sumaiansin.net

宮城県

宮城県復興支援・伝承課 担当：大泉

電話 022-211-2424

メール denshoh@pref.miyagi.lg.jp

福島県

ふくしまの今とつながる相談室 toiro

電話 024-573-2731 (月・水・金 10:00~17:00)

メール toiro@f-renpuku.org

※祝祭日の場合は休み

北海道における被災避難者の受入状況

下記の避難者数は、復興庁が公表している「避難元へ帰還の意思を確認できた方」の数です。なお、北海道庁では、さらに幅広く「ふるさとネット」(右記参照)に登録しているみなさまに、今後も引き続き、お知らせ(本紙)をお届けしてまいります。

〈からから便り郵送世帯数(避難元別)〉: 岩手県16、宮城県63、福島県177、その他33

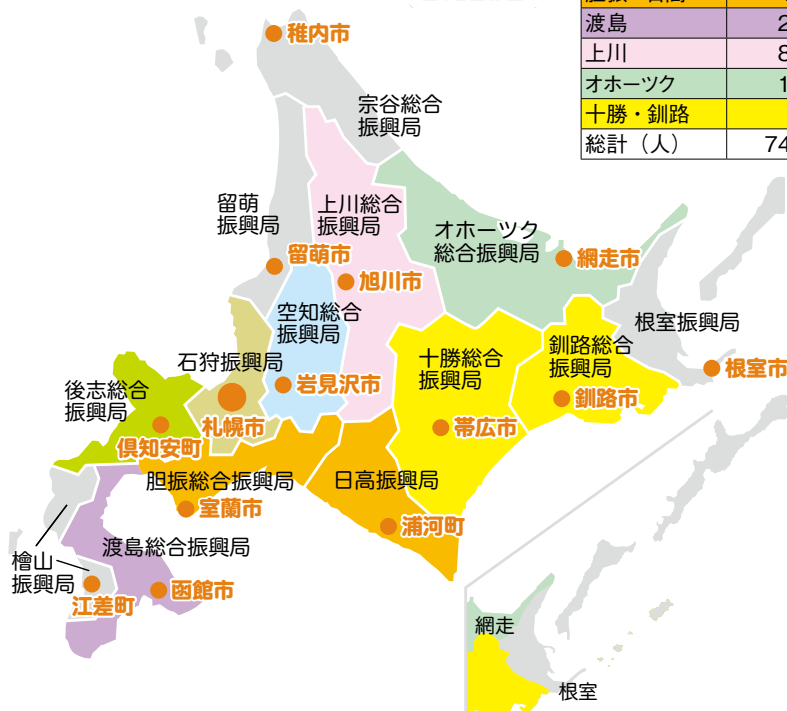
※2025年1月末現在

市町村別の受入状況は、北海道の
ホームページからご覧いただけます。



2024年11月1日現在

| | |
|-------|-----|
| 空知 | 28 |
| 石狩 | 507 |
| 後志 | 34 |
| 胆振・日高 | 48 |
| 渡島 | 22 |
| 上川 | 84 |
| オホーツク | 14 |
| 十勝・釧路 | 7 |
| 総計(人) | 744 |



全国避難者情報システム「ふるさとネット」 の登録について

「からから便り」は「ふるさとネット」の登録情報をもとに
発送しています。「ふるさとネット」は北海道が運用する被災
避難者サポート登録制度です。この制度は自治体の転
出入届とは連動しておらず、転居の場合は住所変更のご
連絡をいただかなければ、郵送物が「所在不明」として
返送されてしまいます。転居、登録解除など、「ふるさとネ
ット」の登録内容に変更がある場合はご連絡ください。

■連絡先

① NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター

② 北海道総合政策部地域創生局地域政策課

電話: 011-206-6404

メール: shienhonbu@pref.hokkaido.lg.jp

③ 避難先市町村の担当窓口

(市町村により部署が異なります)

編集後記

2024年度最後のからから便り、いかがでしたか? 今号の取材のためにはじめて議会の会議録
をダウンロードして読みました。議員さんの発言
もさることながら、北海道や札幌市の担当者の
話の中に「そうだったんだ!」と知ることがあり
ました。去年取材に行った東北では、伝えるた
め、忘れないための活動が続けられており、東北
へ行ったときに立ち寄りた場所が、また増
えました。(金榮)



道内避難者心のケア事業

ウェブサイト: https://hnposc.net/311_hokkaido

からから便り Vol.4 2025年2月10日発行

発行: NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター

〒064-0808 札幌市中央区南 8 条西 2 丁目 5-74 市民活動プラザ星園 201

電話: 011-200-0973 FAX: 011-200-0974 メール: info@hnposc.net

委託元: 北海道

お預かりした個人情報は、避難者の生活支援のために利用するほか、出身県への提供など限定した目的にのみ利用し、その他目的には一切利用いたしません。

【無断転載・コピー】

本紙掲載の写真・図版・記事などを許可なく無断で転載することを禁じます。